

令和元年5月23日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K11941

研究課題名(和文)アカデミックナースによる病院と大学のパートナーシップモデルの構築

研究課題名(英文) Construction of the partnership model of a hospital and the university by the academic nurse

研究代表者

寺田 八重子 (TERADA, YAEKO)

名古屋大学・医学部附属病院・助教

研究者番号：70768382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：看護キャリア支援室の教員と大学教員、臨床看護師(アカデミックナース)5名が協働してSP(模擬患者)参加型教育プログラムを作成し、臨床実習前の看護学生の教育に取り組んだ。実習内容は、講義とブリーフィング、学生とSPの看護面接10分の中で、情報収集と基本手技の課題に取り組み、リフレクションを15分行った。

「実習から学び」は、「観察」、「コミュニケーション」、「言葉の意味」、「生活者の視点」などであり、看護ケア実施時の重要な気づきが得られたと考える。一方で、「必要な情報の提示」の記載は少なかったことから、ケアの対象者に必要な援助を考え、伝える演習の検討が必要と考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療を担う看護学生の育成において、実習の前に模擬患者を活用することで、実習時間短縮や経験不足による不十分な技術習得、コミュニケーション力を含む社会人基盤力の低下に対し、患者への看護技術やコミュニケーションを事前に学び、患者に安全で安心した看護実習の関わりにつながる。

また、人員不足や業務量の多さに臨床指導を負担に思う臨床看護師と臨床に遠慮している教員間の連携には大きな溝がある。両者が協働してプログラムを作成することで、両者の連携が円滑となり、看護学生が学びやすい実習環境を整えることができる。看護学生は、臨床看護師との関係性を築きやすくなり、臨床看護師は看護学生の理解につながる。

研究成果の概要(英文)：With collaboration between 4 academic nursing teachers, including nursing teachers in the career support office and 5 clinical nurses, they developed a communication training program using simulated patients (SPs) to give better education for undergraduate nursing students. Teaching program is consist of lecture, briefing, the nursing interview with SPs in 10 minuets including information gathering, basic clinical skills. In addition, 15 minuets of reflection was followed. Qualitative analysis found that students learned "observability", "communication" and meanings of words" "viewer of living person etc., and I think that important awareness at the time of nursing care implementation was obtained. On the other hand, since there were few descriptions of "presentation of necessary information", I think that it is necessary to consider the necessary support for the target of care, and to consider the practice to convey.

研究分野：看護教育

キーワード：アカデミックナース 教員との協働 模擬患者 演習の教育効果

1. 研究開始当初の背景

(1) 新人看護師の実践能力の低下の背景

看護実習環境の変化

施設側から新卒者の技術の習得が十分ではないという指摘が多い。手技範囲の制限、実習時間の縮小など、看護と看護教育を取り巻く環境が大きく変化したことにより実習における実施体験が減少したのに加え、問題解決指向の看護課程展開に重点が置かれ、患者を1～2人受け持つ実習方法が中心になり、実習で経験できる内容も限定されている。臨床の看護実習の環境の変化が卒業前の看護学生の实践能力の育成を阻害する要因の1つと考えられる。

看護学生の社会人基礎力の低下

近年のITの発展に伴い、ソーシャルネットワークによるコミュニケーションが広く普及している。顔の見える関係からネット上へとコミュニケーションの場が移行したことで人間関係は希薄となり、コミュニケーションは同世代の仲間との閉塞的な付き合いに限定されてきている。これは現代の若者の社会問題といえ、看護学生も例外ではない。川田<sup>1</sup>は看護学生の「生活体験の乏しさ」を指摘し、他者への関心や思いやり不足をもたらす危機的状況と報告している。また、岩崎<sup>2</sup>らは学生自身が「話し方」「自分の態度」に改善が必要と感じていると述べている。コミュニケーション能力の不足が多く指摘され、コミュニケーション教育の強化が明示されている。

このような対人関係を円滑にするための知識や態度、コミュニケーション力を含む社会人基礎力が低下している。一方、看護実践では、常に人間を対象として活動を行うため、人対人の信頼関係の基盤となるコミュニケーション能力が不可欠となる。看護基礎教育において社会人基礎力の底上げを図ることは急務である。

<sup>1</sup>川田智美. 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面. 群馬保健学紀要, 2005; 26: 133-140. <sup>2</sup>岩崎陽子, 滝下幸栄, 松岡知子. 2007; 38(5): 309-319.

(2) 臨床看護師と教員間の連携不足

臨床看護師は7対1看護体制による看護師不足で多忙を極め、臨床指導をすることに負担を感じている。一方で、教員は臨床に対する遠慮があり両者の連携には大きな溝が存在している。実習中の学生は、臨床看護師との関係性が作りにくいことによるストレスや看護課程の展開により膨大な記録に疲弊している現実が報告されている。

学生にとって安心安全な実習環境を整備し、現場との乖離を減少することが必要である。教育担当の臨床看護師をアカデミックナース (Academic Nurse :AN) と称し、各病棟に協力を求め、ANが臨床実習前の教育に参画し、看護教員と協働して体験型演習を繰り返し行い、学生の看護実践能力の底上げを図ることが求められる。4年間の教育を通して、AN、教員及び学生の友好関係を築くことが鍵となろう。(図1)

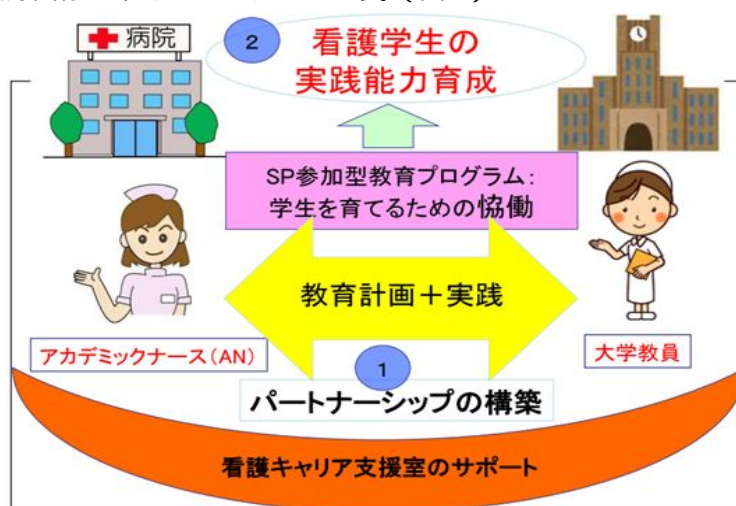


図1: パートナーシップモデル

(3) 模擬患者 (SP) 活用の意義

SPとは、シナリオを基に一定の練習をし、学習者の医療面接の練習相手をする一般市民のことをいう。感情のある生身の人間を相手に練習する点、学習者に適度な緊張感と動機づけができる点で教育効果は高い。また、失敗しても繰り返し体験できるため、学習者にとっては安全

な練習の場と言える。

また、実習直後にフィードバックを受けるため、行動変容に結びつきやすい。患者との実習不足を補い、学びを促進する有効な学習方略である。本研究分担者の阿部恵子は模擬患者養成  
の専門家としての実績があり、AN 及び教員と SP 参加型教育プログラムを作成する際に実践力  
がある。

## 2. 研究の目的

本研究では、AN が橋渡しとなりスムーズな実習へ移行できるようなパートナーシップモデル  
を構築する。また、その効果をアンケート調査及び学生、AN にそれぞれインタビューを行い質  
的に分析する。

## 3. 研究の方法

本研究は3つのプロセスを経て実施した。

(1)AN と大学教員との協働による SP 参加型教育プログラムを作成し、実践した。(図 2、3)

スケジュール	
10:00-10:20	コミュニケーションに関する講義
10:20-10:30	ブリーフィング(実習の説明)
10:30-11:40	SP参加型看護面接 前半 (70分)
11:40-12:40	昼食
12:40-13:50	SP参加型看護面接 後半 (70分)
13:50-14:40	グループで学びをまとめる(KJ法)
14:40-15:20	発表
15:20-15:40	まとめ(教員、SPのフィードバック)

図 2: プログラムスケジュール

### 模擬患者参加型看護面接

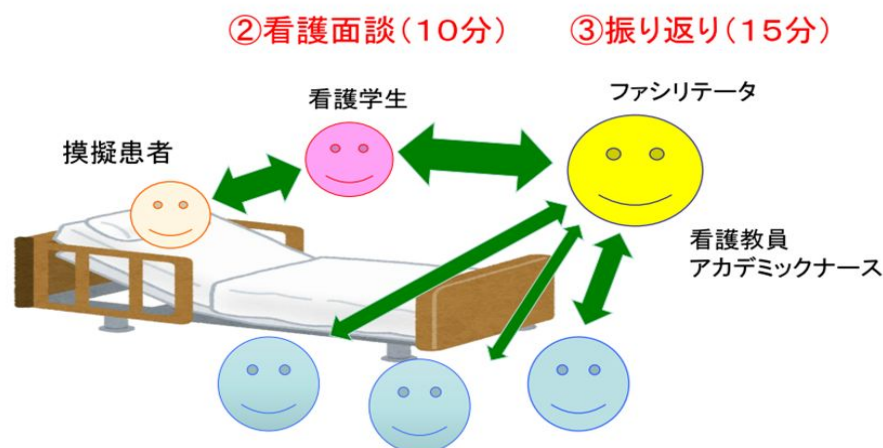


図 3: 模擬患者参加型看護面接

(2)看護学生に対しては実習前後でコミュニケーション評価票を用いて評価を行いその効果を  
明らかにした。第1回目では、病院実習前後で実験群と対照群で比較した。

(3)教育介入を行った学生を対象に、臨床実習を終了後、5名程度の学生、教員それぞれに半構  
造型インタビューを行い、質的に分析し、その教育効果と病院実習のあり方について明らか  
にした。3年次生に対しては教育介入後にインタビューを実施した。

## 4. 研究成果

岐阜大学医学教育開発研究センターにてワークショップを2016年8月20-21日「看護教育にお  
ける模擬患者養成ABC」と、翌年の2017年7月22-23日では、前年度のANがタスクとして「看護にお

ける模擬患者参加型教育をデザインする」を企画運営した。今後、ANと看護教員との協働によるSP参加型教育プログラムを作成するにあたり、看護教育の基本的概念と方法論の共通理解を図るために、新しいANが参加した。ワークショップでは、教育プログラム作成のためのインストラクショナルデザインを学び、実習のリフレクションの方法などを習得した。その後、毎月1回3～6ヶ月程度の事前準備を行った。(図4)

## 協働作業のスケジュール(月に1回)

7月:全体オリエンテーション(全8回)

平成28年度	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	2月
時間	2日間	3	3	3	3	3	3	14日(火) 10:00-16:00
場所	岐阜大学	鶴舞 キャンパス	鶴舞 キャンパス	鶴舞 キャンパス	鶴舞 キャンパス	大幸 キャンパス	大幸 キャンパス	大幸C 5F実習室
内容	看護教育 の基本WS	任先生 講演 + 目標設定	目標設定+ シナリオ1・ 2大筋決め	シナリオ1 ブラッシュ アップ	シナリオ2 ブラッシュ アップ	リフレク ション 方法	リハーサ ル	本番
参加者	AC 大学教員 看キャリア教員	AC 大学教員 看キャリア教	AC 大学教員 看キャリア教	AC 大学教員 看キャリア教 SP	AC 大学教員 看キャリア教 SP	AC 大学教員 看キャリア教 SP	AC 大学教員 看キャリア教 SP	AC 大学教員 看キャリア教 SP

AC:アカデミックナース SP(Simulated Patient):模擬患者

図4:計画の実際

3.(2)と(3)に関しては、まとめて成果を報告する。看護学生の参加は、1回目(2016年度)は2年次生16名、2回目(2017年度)は3年次生13名、3回目(2018年度)は3年次生12名であった。1回目は基礎看護学、2、3回目は老年看護学の枠にて実施した。実習内容は、Kolbの体験学習とリフレクション方法に関する事前講義とブリーフィングののち、各学生がSPとの看護面接10分で情報収集と基本手技の課題に取り組み、15分のリフレクションを行った。経験学習理論に基づき学習者の体験から気づきを引き出し概念化した。

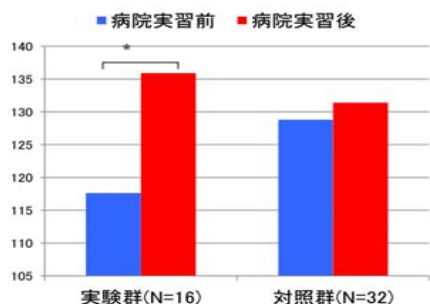
1年次アンケート調査は病院実習前後で実験群と対象群で実施した。実習終了後、グループで「この実習から学んだこと・気づいたこと」についてKJ法にてまとめ発表を行った。その中で「観察」「コミュニケーション」「生活者の視点」などの発表があり、体験をととして重要な気づきを得ていた。

アンケートの分析は、SP実習前と病院実習後の対応のあるサンプルによるWilcoxon検定の結果、情動能力調査票(TEIQue-SF)得点は、実験群で有意な上昇が見られた( $P<0.05$ )。また、共感能力測定票(JSPE HP-ver)の得点も同様に実験群で有意な上昇がみられた( $P<0.05$ )。一方、対象群では共に有意な結果は見られなかった。この結果から一定の教育効果があったと考える。この結果は2017年12月に第37回看護科学学会にて発表した。(図5)

## コミュニケーションに関するアンケート調査の結果

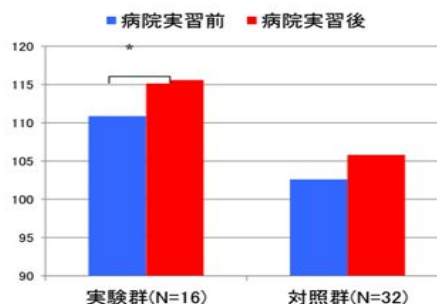
### ①情動能力を測定するアンケート

自他の感情を認識し、適切に感情に対処し、コミュニケーションできると考える認知度を評価(自己効力感)



### ②共感能力を測定するアンケート

患者の経験、関心事、考え方の理解を含めた認知特性を評価(自己認識)



対応サンプルによるWilcoxonの符号付き順位検定 \* $P<0.05$

図5:アンケート調査結果一例

2017年度は、老年看護学臨床実習前の3年次生13名、2018年度12名を対象に同様なスケジュールにて老年看護学の教員と協働し、認知症SP参加型演習における学生の教育効果を評価した。グループワークの記載25名分を質的に分析した結果、学生は、認知症SPの〈表情〉〈言動〉〈生活環境〉などの視点から「援助に必要な情報収集」を行っていた。また、〈笑顔〉で〈視界に入る〉、〈関心を寄せる〉〈安心を保証する〉といった「信頼関係を構築する援助」、〈世界観を予測〉〈結びつきを深める〉〈意思を尊重〉〈興味・関心の活用〉など「信頼関係を進展する援助」を学んでいた。さらに、〈言動の意味を実感〉〈言動の意味を検討〉するといった「言動と心中を関連付ける援助」、〈言語的コミュニケーションの工夫〉〈非言語的コミュニケーションの活用〉による「認知機能障害を補完する援助」、〈認知機能障害の症状を知る〉〈現実との相違を受容〉〈混乱が生じない工夫〉などの「認知機能障害に合わせた援助」を学んでいた。

臨床看護師、教員、SP間で協働して演習内容や学習目標を検討したことで、認知症高齢者の援助に必要な情報を多角的に観察し、信頼関係を構築・進展させる援助、認知症高齢者に特有の援助が学べたと考える。一方で、認知機能障害の情報収集の視点、認知機能障害に合わせた援助の記載が少なかった。そのため、認知機能障害のアセスメントの視点と具体的な援助が言語化できる演習内容の再検討が必要と考える。この結果は、2019年6月6日第24回日本老年看護学会にて発表予定である。

2年間のアンケートの分析は、SP実習前後の対応のあるサンプルによるWilcoxon検定の結果、TEIQue-SF得点では有意な上昇は見られなかった( $P < 0.18$ )。JSPE HP-verの得点では有意な上昇がみられた( $P < 0.01$ )。共感能力は向上した一方で、2年次では有意な向上が見られた情動能力に3年次で有意な向上が見られなかった。理由として、周術期患者のケアを行う課題である2年次のシナリオとは異なり、3年次の認知症患者のケアを行う課題では、感情を読み取ることの困難を感じたことが伺える。継続して学習することが必要と考える。この結果は2019年第39回看護科学学会での発表を予定している。現在論文作成中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. Mina Suematsu, Sundari Joseph, Keiko Abe, Hiroki Yasui, Noriyuki Takahashi, Kentaro Okazaki, Jenni Haxton, Morag McFadyen, Patrick Walker, Lesley Diack. A Scottish and Japanese experience of patient-centred diabetic care: descriptive study of interprofessional education on live webinar, Nagoya J. Med. Sci. 2018;80:465-473. 査読有り.
2. Keiko Abe, Masayuki Niwa, Kazuhiko Fujisaki, Yasuyuki Suzuki. Associations between emotional intelligence, empathy and personality in Japanese medical students, BMC Medical Education. 2018;18:47. 査読有り.

〔学会発表〕(計 5 件)

1. Keiko Abe, Yaeko Terada, Masako Miura, Manako Hanya. SPs portraying Standardized Visiting Nurses to train Nurse managers in community, ASPE Annual Conference, Poster, Kansas City Marriott Hotel Jun 17-20. 2018.
2. Keiko Abe, Yaeko Terada, Masako Miura, Ikumi Honda, Etsuko Fuchita. Effects of communication training run by collaboration of clinical nurses and nursing teachers for 2<sup>nd</sup> year nursing students prior to clinical practice. The 37<sup>th</sup> Annual Conference of Japan Academy of Nursing Science. December 16<sup>th</sup>-17<sup>th</sup> 2017, Sendai, Japan
3. 阿部恵子, 寺田八重子, 三浦昌子. 地域の看護管理者向け模擬患者参加型体験学習の試み: 「教える」から「気づきを引き出す」学習へ. 第48回日本看護協会看護管理学会 ポスター札幌コンベンションセンター2017.10.12-13
4. 阿部恵子, 寺田八重子, 三浦昌子, 末松三奈, 半谷眞七子, 淵田英津子, 内山靖. 多職種連携教育(IPE)の2日日程から1日日程への変更がチームワーク能力及びIPEに対する認識に及ぼす影響, 第1回日本ヒューマンヘルスケア学会 口演 人間環境大学大府キャンパス 2017.9.30

〔図書〕(計 2 件)

1. 阿部恵子、本田育美、麦島健一、米谷祐美、岐阜大医学教育開発研究センター編「新しい医学教育の流れ」第 17 巻 3 号 2017、三恵社、名古屋 (p.259-262、ISSN2189-5872)
2. 阿部恵子、本田育美、淵田英津子、藤崎和彦、篠崎恵美子、岐阜大医学教育開発研究センター編「新しい医学教育の流れ」第 16 巻 3 号 2016、三恵社、名古屋 (p.187-190、ISSN2189-5872)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

三浦 昌子 (Miura, Masako)

名古屋大学・医学部附属病院・教授

研究者番号： 20759641

阿部 恵子 (ABE, Keiko)

愛知医科大学・看護学部・教授

研究者番号： 00444274

任 和子 (Nin, Kazuko)

京都大学・医学系研究科・教授

研究者番号： 40243084

本田 育美 (Honda, Ikumi)

名古屋大学・医学系研究科 (保健)・教授

研究者番号： 30273204

淵田 英津子 (Fuchita, Etsuko)

名古屋大学・医学系研究科 (保健)・准教授

研究者番号： 90315846

### (2) 研究協力者

藤崎 和彦 (Fujisaki, Kazuhiko)

岐阜大学・医学部・教授

植村 和正 (Uemura, Kazumasa)

愛知淑徳大学・健康医療科学部

・教授

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。